

「塔婆」は、古代インド語のサンスクリット語で、土を盛り上げてつくられた「塚」もしくは「塔」を意味する「ストゥーパ」を音のまま「卒塔婆(そとうば)」と訳し、略して「塔婆」と呼んだものといわれています。また、やはり古代インド語であるパーリ語の「トゥーパ」を音のまま訳し、「塔婆」となったともいわれており、この「塔婆」に丁寧に「お」を付けて「お塔婆」と呼んでいます。

お釈迦さまは、三十五歳でお悟りを開かれ、その教えを四十五年間にわたりインドの各地で説いて回り、八十歳で亡くなられました。お釈迦さまは亡くなられた一週間後に火葬され、ご遺骨が残りました。このご遺骨を「舍利」といいます。

お釈迦さまが亡くなったことを聞きつけた八つの部族でこの「舍利」を巡って奪い合いがおきそうになりました。そこで、ドローナというバラモンが仲裁に入り、「舍利」は八つに分けられました。遅れてやって来た部族には火葬した場所の灰が与えられ、仲裁をしたドローナはお釈迦さまの「舍利」を収めていた壺をもらいました。

それぞれ八つの地に「舍利」を祀った「ストゥーパ」と、灰をおさめた塔と、壺をおさめた塔の合計十基の塔が建てられました。最初はこれら十基であった塔が、約二百年後の紀元前二六八年にマウリヤ王朝の王位に即いたアショーカ王によって、八万四千と例えられるほどたくさんの塔になったといわれています。

仏教徒にとって、「ストゥーパ」はお釈迦さまの「舍利」を祀る「仏の舍利の塔」と書く「仏舍利塔(ぶっしやりとう)」のことを指しましたが、それが次第に三重の塔や五重の塔になったり、石や木の柱になったりして、形を変えていきました。

日本に仏教が伝わる頃「お塔婆」は、亡き人の遺徳を讃え、亡き人のために供養するものへと変わっていきました。墓石や墓標なども「お塔婆」であるといえるのです。

つまり「お塔婆」はまず、仏さま、お釈迦さまをあらわすものであり、仏さまの遺徳を讃え礼拝するものなのです。そして、塔を建てるということは仏教を保護しお釈迦さまの教えを学び広めるということなのです。

そして日本では、塔を建てるという功德を亡き人に廻らし向けるため、塔を板にかたどった「お塔婆」を亡き人の冥福を祈る法事などの機会に建てるようになったのです。